士會奈良

9月号 VOL.534

SHIKAI 2023 NARA

奈良の駅 シリーズ Vol.02

駅名：帯解（おびとけ）駅

帯解駅舎　外観

【沿革】

明治 31 年 5 月：奈良鉄道　京終～桜井間の開通に伴い開設
明治 38 年 2 月：関西鉄道が奈良鉄道を合併　関西鉄道の駅舎となる
明治 40 年 10 月：国有化
昭和 59 年 10 月：駅員無配置化
令和 4 年 6 月：「帯解駅本屋」として「奈良市登録有形文化財（建造物）」に指定

【駅舎概要】

所在地：奈良市今市町一丁目 250
区域区分等：市街化調整区域
構造・規模：木造瓦葺平屋建　123.40㎡(増築部分含む)
建設時期：明治 31 年頃(詳細不明)
※大正 15 年、昭和 40 年代改修
（奈良市公表）

プラットホーム

奈良の駅シリーズ 2 回目は西日本旅客鉄道（JR 西日本）桜井線（万葉まほろば線）の帯解駅です。帯解駅は、大正以降整備された標準的な地方駅舎の姿として残る歴史的価値がある建物です。外観は切妻造桟瓦葺平入で漆喰塗の真壁に腰板張を基調に、正面の庇には銅葺瓦が施されています。

■駅舎の歴史・周辺環境等

明治 41 年（1908）に明治天皇が陸軍の特別大演習で帯解に行幸され大演習を総監されました。その際明治天皇はこの帯解駅を利用されたと宮内庁公文書館所蔵の『幸啓録』に記録されています。広大寺池を見渡す位置にある今市町 2 丁目の高台には、今も「大元帥陛下駐躍之處」（明治 43 年建立）の記念碑が立っています。また、帯解郷土研究会発行の小学生向けの読本『おびとけ』（昭和 42 年）には「円照寺へ行かれる宮さま方は、駅から人力車でした。宮さま方のために、駅には、とくべつのまちあい室もつくられました」とのお年寄りの話が記載されており、また三島由紀夫の『豊穣の海（一）春の雪』（昭和 44 年）には「娘は一等待合室に残して」との文章から、帯解駅舎には貴賓室など特別な待合室があったようです。

現在の駅舎内

帯解駅の周辺には歴史的社寺遺産の帯解寺、龍象寺、圓満寺、八坂神社、春日神社などがあり、東の山中へと広がる一帯は「清澄（きよすみ）の里」とよばれます。眼下には奈良盆地を見渡し、鳥の鳴き声がわたる静かな里山に、菩提仙川（ぼだいせんがわ）のさわさわと流れる音が聞こえる、のどかな場所にあります。

■保存・活用等

令和元年 JR 西日本は老朽化等の理由により奈良市に対して、駅舎を取り壊した後にコンパクト化するか、あるいは地域により保存と活用をされてる成功事例をあげながらこのままで無償譲渡するかを求めました。これを知った地元住民は「帯解駅舎保存、活用の会」を発足、保存を訴えました。この会が地元の特産品などを販売する「にぎわい市」の開催や、「帯解駅舎の歴史とこれから」と題しての講演会や現地見学会を実施し働きかけ、市は協議の結果、令和 3 年に建物を無償で譲り受けます。その後、令和 4 年に文化財としての価値が評価され、登録有形文化財に登録されます。

奈良市は令和 3 年に「歴史的風致形成建造物保存整備事業」の一部に「JR帯解駅舎　改修保存設計委託」の予算を計上し、現在、耐震化とかつての姿に近づける修復並びに地元住民等の活用の場としての実施計画が進んでいます。　【記：住まいまちづくり委員長　伏見康司】

「万葉まほろば線」沿線における駅のあり方
～みんなの居場所を考えよう～

6月25日(日)に開催された建築士の日公開シンポジウム「万葉まほろば線」沿線における駅のあり方～みんなの居場所を考えよう～について報告いたします。今回は住まいまちづくり委員会・天理支部・桜井支部共同で行ったまちあるきの調査内容や、各分野で活動をされている方の報告のあと、駅のあり方について意見交換が行われました。

■第1部　活動報告

第1部では4人の発表者による活動報告を行いました。

□地域資源の掘り起こし　(住まいまちづくり委員会　伏見委員長)

昨年11月3日万葉まほろば線の櫟本駅から天理駅、3月18日長柄駅から天理駅の間を「地域資源の掘り起こし」を目的にまちあるきを実施。本事業のきっかけや調査エリアの歴史的建造物、まちの魅力などについての報告。

□福祉バリアフリーの視点　(ふくまち部会長　福西)

バリアフリー法改正までの経緯、現在のバリアフリー化の課題や配慮すべき点などから、万葉まほろば線の駅舎や周辺環境はどのような現状か4つの駅を比較しそれぞれの特徴などについての報告。

□桜井駅社会実験（都市再生推進法人桜井まちづくり株式会社理事　川端取締役）

まずは三輪駅からはじまった駅前を拠点としたまちづくりについての報告。続いて桜井駅で歴史文化財の活用、駅前広場でのイベント、駅周辺の集客増の為の活動を行った上での発見や問題点などについての報告。

□柳本駅舎の活用（柳本駅中食堂「ピクトン」運営者有限会社南都観光社西口代表取締役）

過去から現在までの駅の利用状況についての報告、地域住民の要望より跨線橋を使わずホームへアクセスできるバリアフリー化の改修工事に至るまでの活動報告や催し物の実施状況等。

■第2部　シンポジウム

第2部では天理市　並河市長、西日本旅客鉄道株式会社近畿統括本部阪奈支社地域共生部　松本室長、都市再生推進法人桜井まちづくり株式会社理事　川端取締役、柳本駅舎管理運営協議会　森脇会長、奈良県建築士会　米村会長にご登壇いただきました。

まずは万葉まほろば線に限らず、ローカル線の全国的な情勢(無人化・駅の活用・無償譲渡等)についてのJR西日本の取組について報告いただきました。また、駅の活用やまちづくり活動についての苦労話やコスト面や運営面、人材面などについて課題点などをお話いただきました。

第1部、第2部の報告を踏まえ、今後の方向性や駅のあり方(コミュニティーの場・周辺の歴史的遺産・観光の拠点・次世代につなぐ資産)がどうあるべきか、駅の活用方法に付いて意見交換をしていただきました。

■シンポジウムを通して

駅舎や駅周辺については物理的な条件や歴史的背景や成り立ちが駅ごとで違っている上、法的な問題や利用者の変化、駅舎の無人化など、考慮すべき要素が複雑なため一概にこれが正解というものはありません。そのため変化が必要になったときは地域住民や鉄道会社、利用者など様々な意見を踏まえ今回のテーマにもあるように『駅のあり方を考える』機会を設ける必要があると感じます。

【記:ふくまち部会部会長　福西正太郎】

吉野ミニ・ツアー「かわかみ源流学園」見学会

～山の想いを私たち建築士はどのように引き継ぐか？～

１．はじめに

奈良県吉野郡川上村では現在、「川上村保育園並びに義務教育学校施設整備事業」として、令和６年４月開校を目指した「かわかみ源流学園」新築工事が進められています。建築木材を川上村産材で用意するため、かつて「土倉庄三郎」が植林を進めた村有林の間伐材も多く利用しています。そこで、かわかみ源流学園の現場構造見学会と併せ、先人の想いを引き継ぎ、「吉野林業500年の歴史を教育の場に残し継承する」という村の想いを伺うため、奈良県建築士会　木造公共建築物等推進タスクフォース主催の本ツアーを企画致しました。

２.ツアーの目的

本ツアーのテーマを「山の想いを私たち設計者はどのように引き継ぐか？」と設定し、山の想いの「語りべ」として４名の講師にお話し頂く機会を設けました。樹齢400年の杉で建てた「かわかみ源流学園」に込める地元の人たちの想い、持続可能な森林造りに懸命に挑む人たち、その想いを受け止め、私たちは建築士として山から何を引き継ぐべきかを考える機会にしました。

３．ツアー報告

実施日：2023年７月８・９日（一泊二日）
参加者：奈良県建築士会会員９名　一般大阪府：１名

８日午後より「森と水の源流館」にて２名の講師からお話を頂き、その後、現場見学、ホテルにて懇親会を行いました。

①　坂口泰一氏　「川上宣言について」

川上宣言発信の中核を担われた氏からは、川上宣言発信の経緯などお話いただきました。

川上村は吉野川・紀ノ川の源流部に位置し２つのダムがあります。流域で繋がる人々との交流を行うことで、人が住み続け山と水を守っていけるような村として存続させることを目指しています。それを宣言として全国に発信したものが「川上宣言」であり、発信に至るまでの経緯を「水源地の森（村有原生林）」の映像と共にお話し頂きました。

私たちが木材を使う意義について、再度原点に立ち戻り考える機会となりました。

②　梶本修造氏　「山行の仕事と木材利用の可能性」

通常、原木のままでは乾燥が難しいとされる芯材の乾燥に対して、立木の状態で先に芯材から乾燥させる「梶本式立木乾燥法」を開発された氏からは、製材前に芯材含水率を下げることで、乾燥期間の短縮、軽量化による運送時の使用燃料の削減、また製材後の木材の割れ、反りも軽減できる。といったお話と、木材は限りある資源なので、林業・製材業・建築業ともっとお互いに情報共有を行い、無駄のないようにしていきたいとお話をいただきました。

③　「かわかみ源流学園」現場構造見学会

建物概要　設計：株式会社坂倉建築研究所
　　施工：大日本土木株式会社
規模：木造３階建（一部 RC造・S造）
　　１階床面積　1,835.31㎡　２階床面積 1,739.64㎡
　　３階床面積　858.92㎡　延床面積 4,433.87㎡

工事作業中のなか、保育園棟（木造２階建て）内部と敷地一部を解放していただき、義務教育棟（木造３階建て一部RC造の平面混構造）については、建て方作業中の様子を外部から見学させて頂きました。解説者に現場を案内して頂く方式ではなく、各々自由に見学し、設計者、施工者に自由に質問できる方式の見学会であり、十分な質問時間を頂く事ができました。その中のお話でコスト削減の為、木材の材積を減らす事を試みたが、結果、部材断面を統一した方がよりコスト削減になった等のお話も頂きました。

④　栗山忠昭氏　「かわかみ源流学園に対する想い」

懇親会の席では、川上村長である氏をお招きしました。「歴史が詰まった材を用いて子供たちが使う義務教育学校を建てる事が、未来への投資になるという想いで進めている。」というお話を頂きました。

また、アメリカ人ジャーナリストのデイビッド・カパララ氏が制作した短編ドキュメンタリー映画「吉野林業」を鑑賞しながら、差し入れして頂いた吉野の名酒と共に、話に花が咲きました。

⑤　上田一仁氏
「500年の歴史とこれからのビジョンについて」

９日は、（一社）吉野かわかみ社中に伺い、専務理事で川上村参事でもある氏から、吉野林業の基本と現状、吉野かわかみ社中の現在の取り組み等、お話を頂いた後、大滝地区にある高齢級林の見学をさせて頂きました。

学校用材調達の際は、小中学生の見学会や、新規林業就業者への育成支援など、吉野林業の次の500年を考えた取り組みもされているそうです。

４．ツアーに参加した感想

今回のツアーは企画のお手伝いもさせて頂き、大変良い経験となりました。中大規模木造建築を考える際、木材供給ついても考える必要があると伺います。それと同時に川上宣言の「流域で繋がる」に習い、「木で繋がる」交流についても考えてみると、建築する川下だけが決してゴールではない事に気づかされます。川上・川中・川下それぞれの立場で豊かな暮らしが営めるような関係づくりに今後、どのように自身が関われるか考えていきたいと感じました。

【記：吉野支部　向川智己】

お知らせ

●国土交通大臣表彰を受賞！
中尾七隆　副会長が令和５年建設事業関係
功労者等国土交通大臣表彰を受賞されました。

●山の辺の道等歴史的な建造物等の掘り出し事業
第３回まち歩きが10月１日（日）に開催されます。

●第65回建築士会全国大会「しずおか大会」が、
10月27日（金）・28日（土）に開催されます。

●入会
島田　光章　様（高田支部）
堀口　敦由　様（高田支部）
よろしくお願いいたします。

●訃報
森長　由起子　様（天理支部）
ご冥福をお祈りいたします。

編集後記

私事ですが、現在、私の手持ちの建築士会月刊誌「建築士」は、2017年９月号以降の会誌のみです。入会以来、数十年分の本誌を古雑誌として毎年処分しておりました。今となっては大変惜しい気持ちです。

当年９月号からの会誌を残している理由は、本誌のCPD講座で「日本の木造架構史」の講義が始まったからです。第１回は、「伝統の継承と創造　歴史に学ぶ意味　その１」の講義でした。そこでは、平安時代以後の建物から耐震、耐風の筋交いが姿を消している事や、江戸時代中期には、歌舞伎舞台のような大空間を間伐材、孟宗竹、縄等を使用して建造していたことが記載されています。ちなみに私は、十数年ほど前から城郭巡りの旅に魅了されており、この講座で城郭がテーマになればと期待しておりましたら、期待通り2018年４月号で、第８回「近世の城郭・藩校」の講義がなされました。そこでは、石垣や上部構造が崩れない理由や、城郭の構造と耐震性についての下屋トラス、木造ラーメン構造の解説は興味深いです。その後、2017年９月号以降の本誌のCPD講座は受講し、興味ある記事や空き家問題等の特集などはマーカー、付箋などを付けて読んでストックしています。しかしながら、2017年９月号から今月号までの会誌の６年分が嵩張ってしまい、今後どうしたものかと新たな悩みです。

【情報・広報委員　平田正裕】

９月　10日（日）二級建築士試験（製図）

10月
1日（日）山の辺の道「第３回まち歩き」
8日（日）一級・木造建築士試験（製図）
18日（水）監理技術者講習
27日（金）全国大会しずおか大会

士 會 奈 良 通巻651号
令和５年９月１日（発行隔月１回１日発行）
発　行　所　一般社団法人　奈良県建築士会
〒630-8115　奈良市大宮町２丁目5-7　奈良県建築士会館
電話：0742-30-3111　FAX：0742-33-4333
https://nara-kenchikushikai.or.jp/
info@nara-kenchikushikai.or.jp
発行責任者　米　村　博　昭
編　　集　（一社）奈良県建築士会　情報・広報委員会

情報・広報委員会
委員長　福田　成生
副委員長　伊藤　吉郎　　小西　直樹
委　員　吉村　晃人　　平田　正裕
門脇　直也　　溜谷　剛
永友　翔　　松尾　憲治
上柿　範兼　　鈴木　茂
小松原寛俊　　洞　尚樹
押部　誠